



ハンミョウ

1、2019年のナガバノイシモチソウ-2

1) 自生個体数の変化

2019年のナガバノイシモチソウは大規模植生回復作業を開始して以来、個体数が初めて減少しました。個体数計測は毎年7月末日前後を基準日としていますが今年は7,022個体になり、前年の約60%に減りました。しかし、その後個体数は順調に増え、9月2日には、9,310個体に、10月7日には9,425個体になりました。2018年の最高個体数が9月5日の12,089個体ですので、昨年約80%程度まで回復しました。

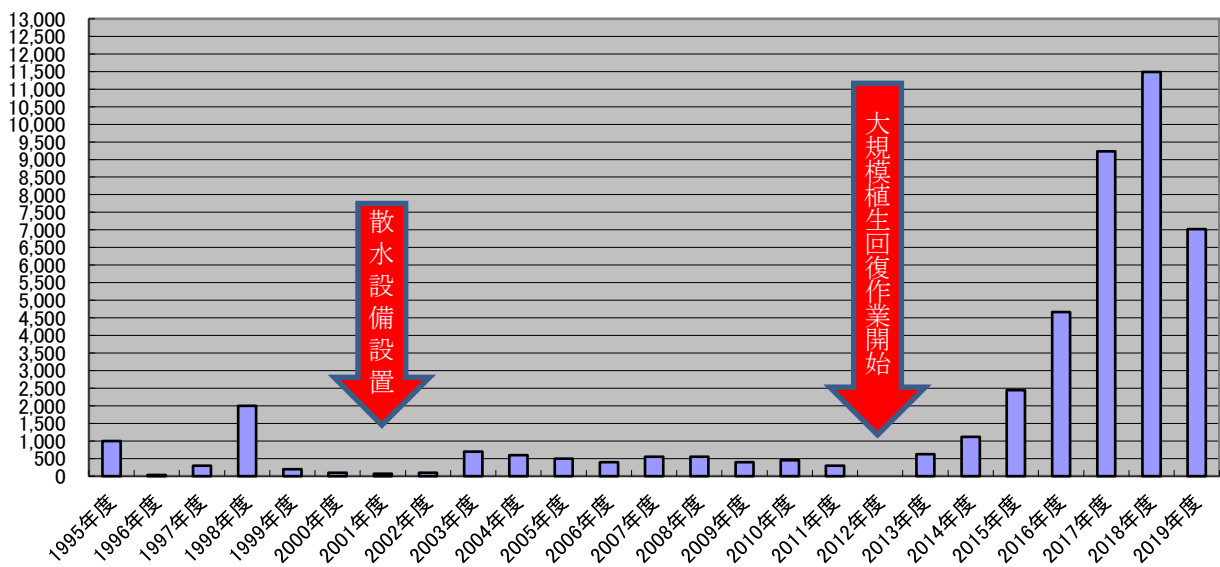
今年、これだけ減少した原因はよくわかりませんが、2018年11月頃から2019年3月頃が記

自生個体数、最高・平均開花数一覧

年度	自生個体数	最高開花数	平均開花数
2011年度	300個体	135輪	35輪
2012年度	推定 300個体	145輪	55輪
2013年度	622個体	170輪	73輪
2014年度	1,120個体	374輪	116輪
2015年度	2,444個体	471輪	144輪
2016年度	4,664個体	817輪	307輪
2017年度	9,233個体	1,436輪	587輪
2018年度	11,487個体	4,320輪	1,169輪
2019年度	7,022個体	2,808輪	1,104輪

*2012年度は自生個体数の記録なし

ナガバノイシモチソウ自生個体数の変化(基準日:7月末)

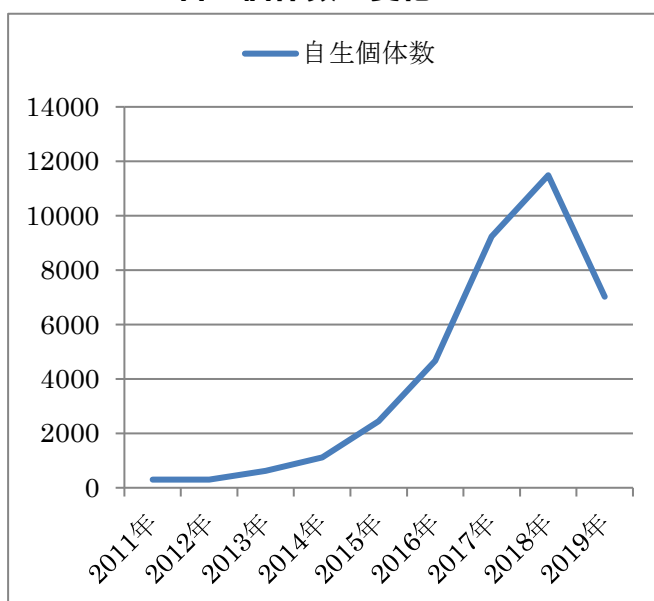


録的な大渇水で、東三河の水がめである宇連ダムも30年ぶりに貯水量がゼロになってしまいました。個体数が減少したのは、この大渇水の影響が大きかったのではないかと考えられます。しかし、全体的に見ればまだ増加傾向は続いています。

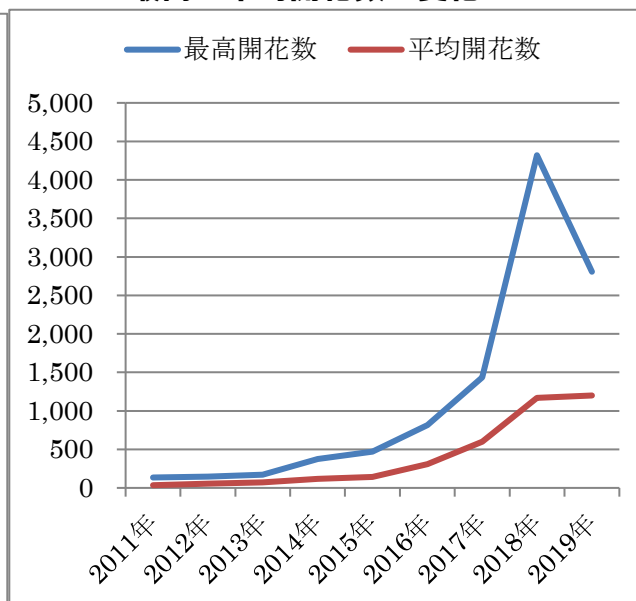
2) 開花数の変化

昨年はナガバノイシモチソウの開花数が急激に増加しましたが、今年は大きく減少しました。最高開花数は、昨年の4,320輪から2,808輪になり、約65%減少しました。これは個体数の減少とほぼ同程度です。しかし、平均開花数は、昨年の1,169輪から1,104輪になり、約95%でほぼ昨年並みです。個体数が減ったにもかかわらず、平均開花数がそれほど減らなかったのは、各個体の成長が良く大型の個体が増え、花茎も増えて一個体あたりの開花数が増えたためと考えられます。

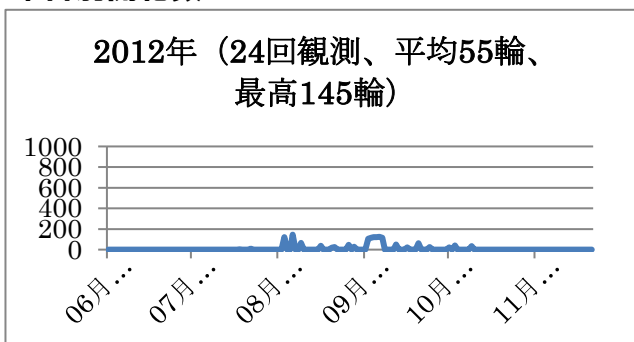
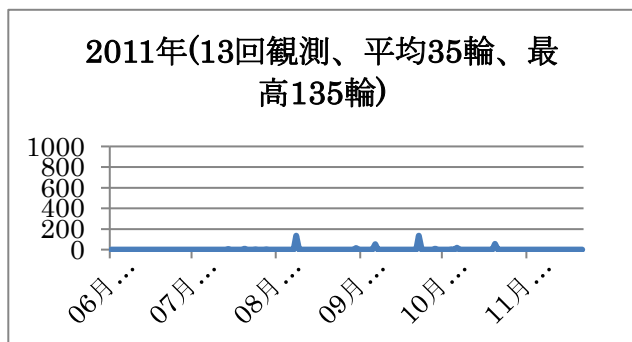
自生個体数の変化



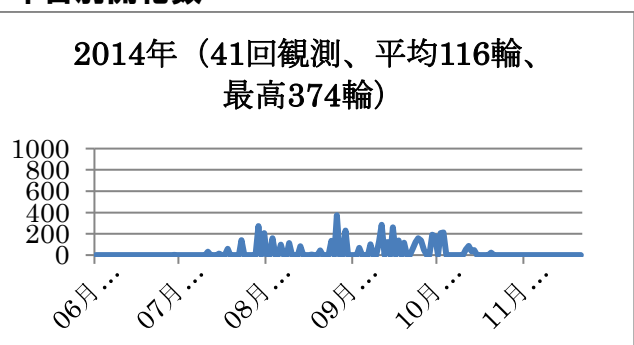
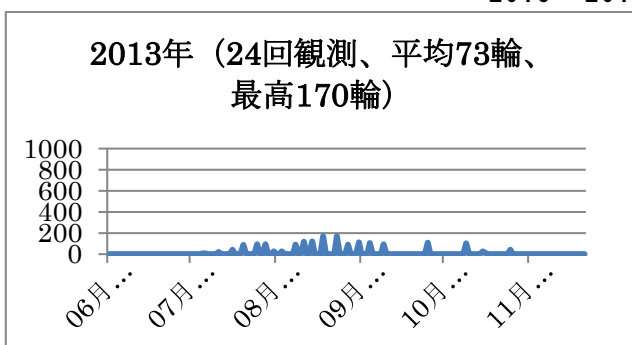
最高・平均開花数の変化



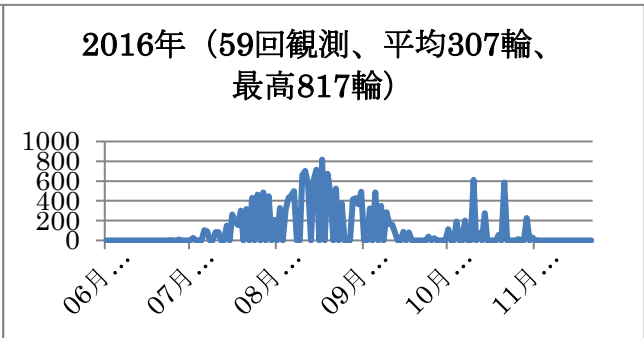
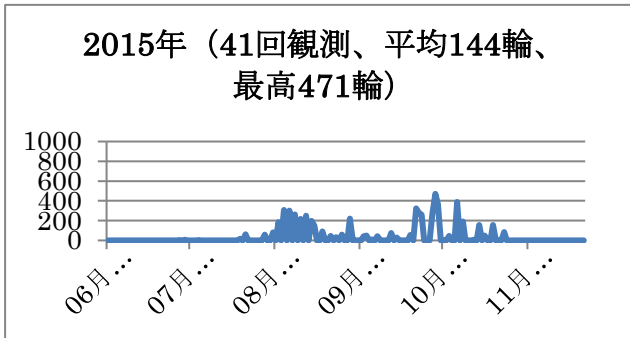
2011・2012年日別開花数



2013・2014年日別開花数



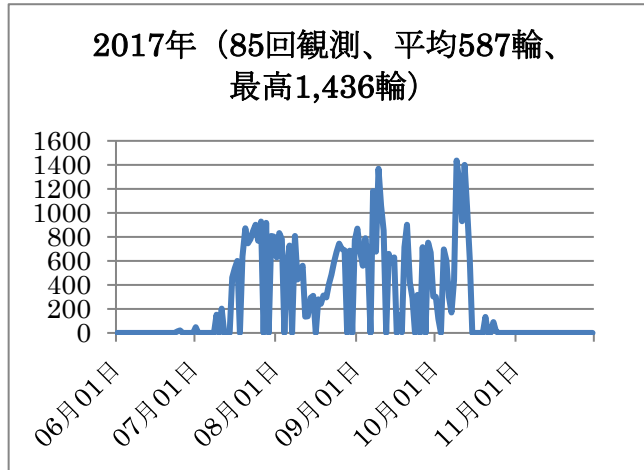
2015・2016年日別開花数



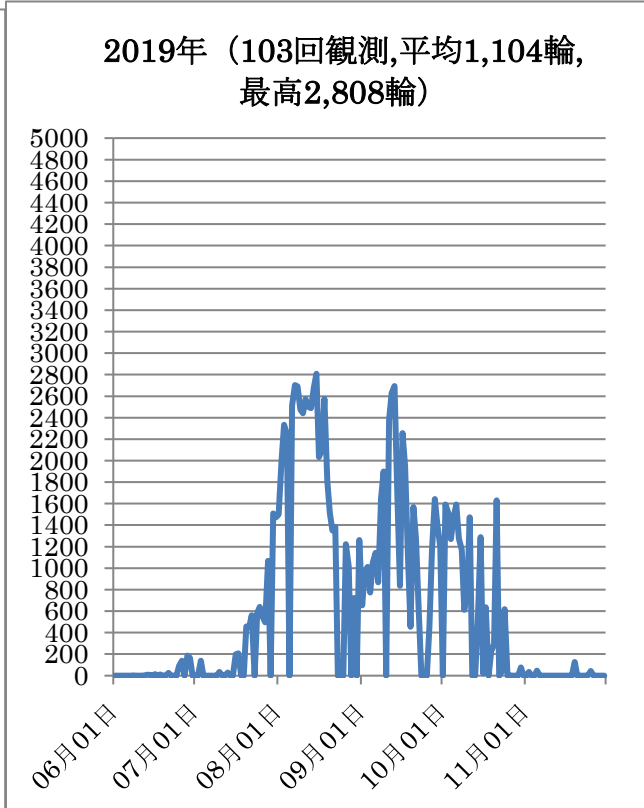
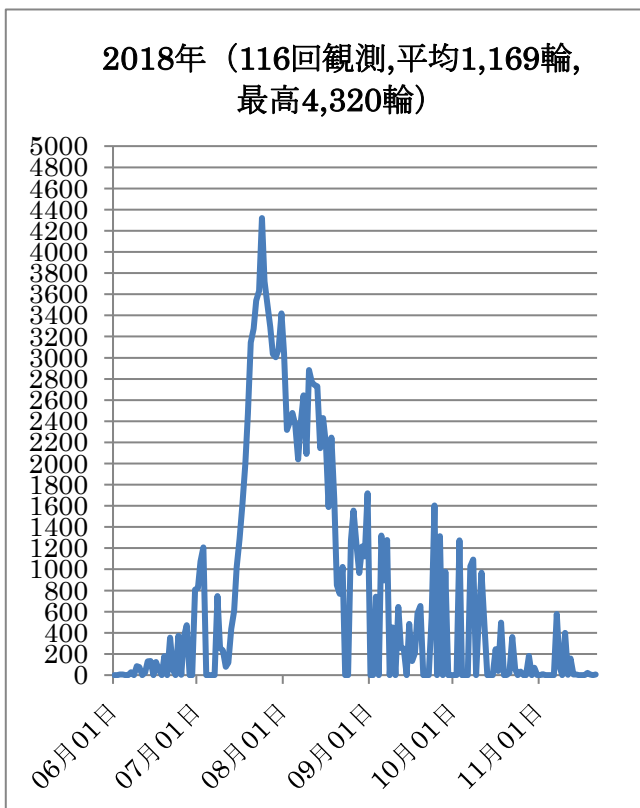
2011年から2016年までは、平均開花数、最高開花数ともに緩やかに伸び、2017年から2018年にかけて大きく増えました。特に最高開花数は2018年に前年の3倍になりましたが、2019年には大きく減らしています。

開花のパターンを見ると2011～2014年は開花数自体が少なくパターンははっきりしませんが、2015年には8月と9月後半にピークが現われ、2016年には7月から9月前半に大きな山が、10月に小さな山の二つのピークが現われました。2017年には7月

2017年日別開花数



2018・2019年日別開花数



後半と9月上旬、10月前半の3つのピークが現われています。2017年は7月後半から10月前半の開花期全体が増減を繰り返しながら平均開花数も前年の2倍程度に増加しています。2018年には最高開花数が突然3倍に増えましたが、8月後半以後は開花数が大きく落ち込み、さらに開花しても長続きせず、短期間に大きく増減を繰り返しました。2019年の

最高開花数は減少しましたが、平均開花数はほぼ前年並みでした。開花数のピークは8月と9月中旬にあり、8月のピーク以後は全体に開花数が多い状態が続いています。

これまでのナガバノイシモチソウの開花パターンでは、7月末から10月初旬までの間に大きなピークが2～3回あることが分かりましたが、開花数は一定ではなく増減を繰り返しています。さらに、増減や開花のパターンは一定ではなく、各年でばらついており、少なくとも、開花期間中に同程度の花が咲き続けるという状態ではないようです。来年がどうなるかは詳しく観察したいと思います。

2. 2019年度作業報告-2

1) 外来種等の駆除

今年度の作業はQ・R地点の木の伐採以外にメリケンカルカヤ等の外来種、ネザサ等の侵略的植物の駆除を積極的に進めています。昨年度約6,700㎡の抜根作業をして裸地化した地区が多くあり、駆除作業をしなければならない状況です。これまでのように月1回の定期作業では処理できないような量になっています。

G地点での作業は一の沢湿地とその東側の草地で行っています。2017年度にバックホーで抜根作業を行い2年目の状態ですが、完全には除去できなかったネザサが勢力を増しつつあります。

H地点は2018年度に抜根を行い、作業後1年目になります。まだ発芽している植物は少ない状態ですが、画面右側の木道沿いは水分が多く、ヌマガヤ、イヌノハナヒゲ、ミズギボウシ等が発芽してきました。ここでもネザサの根をできる限り除去しています。

P地点も2018年度にバックホーで抜根作業を行いました。中心部分は水分が少なく草地として再生していくと予想しています。周辺は水分が多く、湿生植物が復活してきました。中心部分はアカメガシワが発芽しましたが、数はそれほど多くはありません。

湿地中心部南側のC・G地点を中心とした林縁部ではアカメガシワが2,000本以上発芽しましたが、湿地中心部のP地点では発芽する量は少なく、地形的な条件の違いを示していると思われます。同じような草地でも異なった植物が発芽してくるのか今後観察していきます。



G地点作業風景（2019年11月17日）



H地点作業風景（2019年11月5日）



P地点作業風景（2019年11月5日）